

資 料

## 高齢者を理解するために生活史を用いた教育に関する検討

加藤 和子<sup>1</sup> 窪内 敏子<sup>1</sup> 福田 裕一<sup>1</sup> 金岡 哲二<sup>1</sup> 小林 尚司<sup>1</sup>

### 要旨

本研究は、学生を対象にした高齢者の生活史を用いた教育に関する文献を検討し、教育方法の違いによる学生の学びの内容を明らかにすることを目的とした。対象は、医学中央雑誌 Web で「高齢者」「看護教育」「生活史」をキーワードとして検索された、過去 10 年間の 13 件の文献である。教育目標は「高齢者理解」「老年観の変化」「高齢者に対する情意の変化」「高齢者の生活を捉えることの意味を考える」の 4 つに分類され、さらに高齢者理解の具体的目標が示された文献もあった。教育方法は高齢者へのインタビューを行うものと、インタビューは行わず、DVD を視聴する方法、講義において説明する方法、実習における体験を振り返る方法があった。生活史を用いた教育方法は、様々な目的で用いられていたが、その目的や意味を十分に検討したうえで、教育方法や学習内容を精選する必要があると考えた。また、学生が、生活史が現在の高齢者の生活習慣や価値観を形成していることを理解するためには、インタビューを行うだけでなく、その結果を講義やグループワークを通して振り返って意味づけるプロセスが必要であると示唆された。

キーワード 高齢者 看護教育 生活史

### I はじめに

高齢者の状況に応じて看護を実践していくためには、対象である高齢者とその家族を理解することが重要である。しかし、学生にとって、高齢者を理解することはたやすいことではない。

看護学生を対象とした、高齢者を理解するための学習方法としては、高齢者疑似体験を取り入れた方法（岡本，高田，泉，2013）、視聴覚教材を取り入れた方法（古城，木下，2007）、ライフヒストリーのインタビューを取り入れた方法（松田，福田，梅田他，2015、伊藤，大町，中山他，2007）がある。高齢者の現在の姿は、今まで生きてきた人生の延長線上にあり、生活背景、価値観、信条などにより形成されたものである。高齢者をこのような存在として理解するためには個人の生活史を用いた学習が効果的であると考えられる。しかし、筆者らの経験において、高齢者の生活史の情報を得ても、単に過去の情報として捉え、現在

の姿を形成する要素であるという意味を考えない学生もいる。そのため、個々の学生により、生活史の情報の捉え方や解釈が異なり、高齢者の理解に差が見受けられる。このことから、学生が高齢者の生活史を把握する意味を理解し、今ある高齢者がどのように形成されてきたか、なぜそのような姿なのか考えることができるようになるために、生活史を用いた教育をどのように行うとよいかを検討する必要があると考えた。

そこで、本研究は、学生を対象にした高齢者の生活史を用いた教育に関する文献を検討し、教育方法の違いによる学生の学びの内容を明らかにすることを目的とする。教育の方法による学生の学びの内容が明らかになることで、高齢者理解のための生活史を用いた効果的な教育の実践に結びつくと考えた。

### II 研究方法

#### 1. 文献検索方法

医学中央雑誌 Web (Ver. 5) で、過去 10 年間の文献を対象に「高齢者」「看護教育」「生活史」をキー

<sup>1</sup> 日本赤十字豊田看護大学

ワードとして検索を行った。その結果、19 件の国内文献が該当した。学生を対象に高齢者の生活史を用いた教育の方法と、それによる学生の学びが記載された論文 10 件を抽出した。また、近年においてどのような教育実践が行われているかを広く捉えるために、学会報告抄録の 3 件を追加し、合計 13 件を分析対象とした。

## 2. 分析方法

対象となる文献を精読し、生活史を用いた教育の目標と方法、学生の学びについて記載されている内容を抽出した。次に、教育方法別に学生の学びを、内容の類似性に基づいてまとめた。最後に、教育目標と教育方法、そこからの学生の学びの関連性に基づいて図式化した。

## Ⅲ 研究結果

### 1. 高齢者を理解するために生活史を用いた教育に関する文献の概要 (表 1 参照)

#### 1) 学生によるインタビューを中心とした方法

畑野、蓑原 (2013) は、高齢者理解のため、外来・介護保険関連施設の高齢者へのライフヒストリーインタビューを取り入れた。その結果、学生の高齢者に対するイメージが、「明るさ」「考えの新鮮さ」「素直さ」「強さ」「役に立つ」「積極性」「あたたかさ」「思いやり」「きれいさ」の項目で肯定的に変化した。また、日本語版 Fraboni エイジズム尺度短縮版の総得点が、27.87 から 26.30 に低下し、エイジズムの好意的な変化が見られた。

蓑原、畑野 (2014) は、高齢者の発達課題を理解するため、在宅生活者へのライフヒストリーインタビューを取り入れた。その結果、日本語版 Fraboni エイジズム尺度短縮版の総得点が低下した学生が 70.2%、上昇した学生が 29.8% であった。また、総得点が低下した群では、レポートの中で「生活」と「人生」という用語が多く用いられていた。

坂下、西田、松井ら (2009) は、老年観の変化をみるため、地域の老人クラブと、ボランティアに参加した高齢者へのインタビューを取り入れた。その結果、学生が聞き取った内容は、「日々の生活」「身体の変化」「介護経験」「興味・関心」「家族構成」「人生観

「希望」「他者との繋がり」「昔の生活」「戦争体験」「女性の生き方」「若者への意見」「居住地」の 13 項目であった。インタビューの後は、高齢者に対して、「ひたむきな意欲」「若々しさ」「人を思う優しさ」「経験による強さ」を感じていた。

山本 (2010) は、高齢者理解のため、身近な高齢者へのライフヒストリーインタビューを取り入れた。その結果、レポートの記述内容は、「高齢者の時代背景や生活体験」「高齢者の現在の生活」「高齢者への尊敬・尊重」が多かった。

関、堀内 (2006) は、高齢者に対する意識の変化をみるため、身近な高齢者へのライフヒストリーインタビューを取り入れた。高齢者に対する感想で最も多かったのは、「感謝の思い」「高齢者が生きてきた世代への認識」「高齢者の精神的活力」「ライフヒストリーインタビューの効果の認識」であった。学生の意識の変化は「他者理解と尊敬」「感情と学習意欲」「内在化と態度変容」「自己未来のイメージ化」であった。

櫻井、尾島 (2014) は高齢者を理解するため、身近な高齢者へのライフヒストリーインタビューを取り入れた。高齢者に対する思いには、「頼もしい生き方を尊敬した」「肯定的に受け入れてくれたことに好意を持った」「もっと知りたいと興味が深まった」があった。

小木曾、安藤 (2010) は、高齢者理解のため、身近な高齢者と 1 日過ごしながら、ライフヒストリーインタビューを行う方法を取り入れた。その結果、学生が抱いた高齢者像には、「言葉の重み」「生き方のこだわり」「前向きに生きる」「抱擁的な態度」「自信と誇り」「真摯な姿」「ネガティブなイメージ」「固い意志を貫く」があった。

古城、木下、馬本 (2012) は高齢者の理解を深めるため、祖父母へのライフヒストリーインタビューを取り入れた。祖父母の人生の語りとして、「地域の人的交流と絆は強かったが、今は変化した」「祖父母の苦勞した結婚生活や子育てを語った」「戦争の影響を受けた青春、教育の大切さを実感している」「貧しいがよく働き、我慢と工夫の生活をしていた」があった。祖父母の今後の不安として、「祖父母の健康不安や家族への介護不安がある」「祖父母の生きがいある今の生活と戸惑いもある」があった。学生の学びの深まりとして、「祖父母の人生への理解と敬愛の気持ちが生

表 1. 高齢者を理解するために生活史を用いた教育に関する文献の概要

	著者名	科目 対象者	教育目標	教育方法	データ	学生の学び
1	畑野他 (2013)	高齢者看護学実習 3年生	高齢者理解	外来・介護保険関連施設の高齢者へのライフストーリーインタビュー	事前事後質問紙調査	高齢者に対するイメージが、「明るさ」「考えの新鮮さ」「素直さ」「強さ」「役に立つ」「積極性」「あたたかさ」「思いやり」「きれいさ」の項目で肯定的に変化。 日本語版 Fraboni エイジズム尺度短縮版の総得点が、27.87 から 26.30 に低下。
2	養原他 (2014)	授業科目が不明 2年生	高齢者の発達課題の理解	在宅生活者へのライフストーリーインタビュー	事前事後質問紙調査と事後レポートのテキストマイニング分析	日本語版 Fraboni エイジズム尺度短縮版、総得点が低下した人 70.2%、上昇した人は 29.8%。 日本語版 Fraboni エイジズム尺度短縮版、総得点が低下した群は、レポートの中で「生活」と「人生」という用語が多く用いられていた。
3	坂下他 (2009)	老年看護対象論 2年生	老年観の変化	地域の老人クラブ、ボランティア参加の高齢者へのインタビュー	事後レポートの質的分析	学生が聞き取った内容は、「日々の生活」「身体の変化」「介護経験」「興味・関心」「家族構成」「人生観」「希望」「他者との繋がり」「昔の生活」「戦争体験」「女性の生き方」「若者への意見」「居住地」の 13 項目であった。聞き取り演習の後は、高齢者に対して、「ひたむきな意欲」「若々しさ」「人を思う優しさ」「経験による強さ」を感じていた。
4	山本 (2010)	老年看護学概論 講義前 1年生	高齢者理解	身近な高齢者へのライフストーリーインタビュー	事後レポートの質的分析	レポートの記述内容は、「高齢者の時代背景や生活体験」「高齢者の現在の生活」「高齢者への尊敬・尊重」が多かった。
5	関他 (2006)	老年看護学概論 1年生	意識変化	身近な高齢者へのライフストーリーインタビュー	事後レポートの質的分析	高齢者に対する感想で最も多かったのは、「感謝の思い」「高齢者が生きてきた世代への認識」「高齢者の精神的活力」「ライフストーリーインタビューの効果の認識」であった。学生の意識の変化は「他者理解と尊敬」「感情と学習意欲」「内化と態度変容」「自己未来のイメージ化」であった。
6	櫻井他 (2014)	老年看護学概論 1年生	高齢者理解 (情意領域の学習効果)	身近な高齢者へのライフストーリーインタビュー	事後レポートの質的分析	高齢者に対する思いには、「頼もしい生き方を尊敬した」「肯定的に受け入れてくれたことに好意を持った」「もっと知りたいと興味が深まった」の 3 つのカテゴリーがあった。
7	小木曾他 2010)	老年看護学概論 2年生	高齢者理解	身近な高齢者と 1 日、過ごし、ライフストーリーインタビュー	事後レポートの質的分析	学生が抱いた高齢者像には、「言葉の重み」「生き方のこだわり」「前向きに生きる」「抱擁的な態度」「自信と誇り」「真摯な姿」「ネガティブなイメージ」「固い意志を貫く」があった。
8	古城他 (2007)	老年看護学概論 1年生	高齢者理解の 深化	祖父母へのライフストーリーインタビュー	学びについて KJ 法を用いた分析	祖父母の人生の語りとして、「地域の人的交流と絆は強かったが、今は変化した」「祖父母の苦労した結婚生活や子育てを語った」「戦争の影響を受けた青春、教育の大切さを実感している」「貧しいがよく働き、我慢と工夫の生活をしてきた」があった。 祖父母の今後の不安として、「祖父母の健康不安や家族への介護不安がある」「祖父母の生きがいある今の生活と戸惑いもある」があった。 学生の学びの深まりとして、祖父母の人生への理解と敬愛の気持ちが生まれた。「高齢者理解の深まりと回想はケアや癒しの実感があった」があった。
9	高田他 (2015)	老年看護学概論 1年生	様々な視点から の高齢者の 理解	身近な高齢者へのライフストーリーインタビュー	事後レポートの質的分析	学生の学びには、「生きる力」「新たな高齢者像」「これまでの人生の積み重ねがある」があった。高齢者は、「社会の変化を実感」「理想と現実のギャップによる揺れ」「老いの受容」をしていると理解していた。また、高齢者は、「老いという変化と向き合い人生を充実させる」「前向きに生きていると映った」と感じていた。
10	尾崎他 (2016)	老年看護学原論 受講後 2年生	高齢者を取り 巻く社会や文化の 諸相の理解 高齢者が多様な 経験と背景をもつ 個人であることの 理解	身近な高齢者へのインタビューとその後の考察	事後レポートの質的分析	レポートの内容は、「高齢者の理解と敬うべき対象としての実感」「高齢者の人生と経験の意味を理解することの重要性」「高齢者看護に関する抱負」にまとめられた。
11	成島他 (2010)	老年看護学実習 2年生	高齢者の生活を 捉えることの意味を 考える	実習で受け持ち患者の生活史を聴取し、感じたこと・考えたことについてグループワーク	事後レポートの質的分析	学生の学びは、「対象者の理解の深化：患者の人生、患者の思いや願い、人間像」「看護実践の向上：患者の看護実践を考えるきっかけ、より良い看護実践することができた」「看護者としての成長：より良い看護実践のためには努力が必要、看護者としての姿勢、より良い実践をしたいという意欲が向上」「患者への敬慕の表出：患者への憧れ、患者への尊敬の思い」があった。
12	浅井他 (2015)	1 年次科目終了後	高齢者理解	施設入所高齢者が自らの生活史について語った場面を録画した試作教材 DVD の視聴	事後レポートの質的分析	高齢者について理解した内容として、「健康・自立に対する思い」「今の生活に対する思い」「好みや態度・活力」「これまでの生き方」「自分や自分の世代との違い」「自分とは違う考え方」があった。 高齢者ケアに重要と思ったこととして、「楽しく生き生きと過ごすこと」「役割のある生活」「生きる支えとなる多くの支えがあること」「思いの共有」「その人の歴史や生き方を知る」「今の望みや意思を聞き尊重する」「コミュニケーションの取り方」「身体面でのサポート」があった。
13	清水他 (2014)	老年健康生活支援論 2年生	高齢者理解	教育ボランティアの高齢者による「私の人生の歴史」「いま大切にしていること」「これからの人生」という授業の受講	事後レポートの質的分析	学生の学びは、「戦争の時代を生きた A 氏の体験、生き方からの学び」「高齢者をとらえる視点の再考」「健康に生きることへの探究」「看護師のあり方と理想の看護師像の具現化」「自身の生き方への示唆と学習意欲の向上」の 5 つのカテゴリーにまとめられた。

まれた」「高齢者理解の深まりと回想はケアや癒しの実感があった」があった。

高田、佐藤、小野ら (2014) は、高齢者を様々な視点から理解するため、身近な高齢者へのライフヒストリーインタビューを取り入れた。その結果、学生の学びには、「生きる力」「新たな高齢者像」「これまでの人生の積み重ねがある」があった。高齢者は、「社会の変化を実感」「理想と現実のギャップによる揺れ」「老いの受容」をしていると理解していた。また、高齢者は、「老いという変化と向き合い人生を充実させる」「前向きに生きていくと映った」と感じていた。

尾崎、斎藤、東海林 (2016) は、高齢者を取り巻く社会や文化の諸相の理解と高齢者が多様な経験と背景をもつ個人であることを理解するため、身近な高齢者へのインタビューを取り入れた。その結果、レポートの内容は、「高齢者の理解と敬うべき対象としての実感」「高齢者の人生と経験の意味を理解することの重要性」「高齢者看護に関する抱負」にまとめられた。

## 2) 教員による説明を中心とした方法

浅井、小泉、沼里ら (2015) は、高齢者理解のため、施設入所高齢者が自らの生活史について語った場面を録画した試作教材 DVD を用いた。その結果、高齢者について理解した内容として、「健康・自立に対する思い」「今の生活に対する思い」「好みや態度・活力」「これまでの生き方」「自分や自分の世代との違い」「自分とは違う考え方」があった。高齢者ケアに重要と思ったこととして、「楽しく生き生きと過ごすこと」「役割のある生活」「生きる支えとなる多くの支えがあること」「思いの共有」「その人の歴史や生き方を知る」「今の望みや意思を聞き尊重する」「コミュニケーションの取り方」「身体面でのサポート」があった。

成島、押領、細田 (2010) は、高齢者の生活を捉えることの意味を考えるため、実習で受け持ち患者の生活史を聴取し、感じたこと・考えたことについてグループワークを行った。その結果、学生の学びは、「対象者の理解の深化」「看護実践の向上」「看護者としての成長」「患者への敬慕の表出」があった。

清水、坪井、小池ら (2014) は、高齢者を理解するため、教育ボランティアの高齢者による「私の人生の歴史」「いま大切にしていること」「これからの人生」という授業を取り入れた。その結果、学生の学びは、

「戦争の時代を生きた A 氏の体験、生き方からの学び」「高齢者をとらえる視点の再考」「健康に生きることへの探究」「看護師のあり方と理想の看護師像の具現化」「自身の生き方への示唆と学習意欲の向上」があった。

## 2. インタビューを中心とする方法と教員による説明を中心とする教育方法の違いによる学生の学びの比較 (図 1 参照)

学生による、高齢者に対する生活史のインタビューを中心とした教育方法は、「高齢者理解」「老年観の変化」「高齢者に対する情意の変化」を目標として実施されていた。それによる学生の学びは、【新たな一面の発見】【生きた時代背景】【尊敬】【偏見の解消】【心情の推察】【生活史を知る意義】の 6 つにまとめられた。

教員が作成した DVD の視聴、講義、実習における生活史聴取の振り返りという、教員による説明を中心とする教育方法は、「高齢者理解」「高齢者の生活を捉えることの意味を考える」を目標として実施されていた。それによる学生の学びは、【思いや考え方】【健康への心遣い】【生きた時代】【尊敬】【見方の検討】【自分のあり方の検討】【看護の質の向上】の 7 つにまとめられた。

## IV 考察

生活史を用いた教育方法には、主にインタビューを中心とした方法と、講義による説明や実習の振り返りをグループワークで行う方法があった。インタビューを中心とした方法は、学生にインタビューを行うことを課し、そこから学生自身が気づき考えて学習することを期待する方法である。それに比べて、教員による説明を中心とした方法は、生活史を知りえた場面を教材として、生活史を知るとはどのようなことか、または生活史を知ることの意味について教員から説明することが可能な教育方法である。

それぞれの教育を受けた学生の学びの内容を比較すると、【生きた時代】【尊敬】は共通している。インタビューを中心とした方法にあったのは、【新たな一面の発見】【偏見の解消】【心情の推察】など、それまで自分が知らなかった面の学びである。一方で、教員による説明を中心とした方法では、【思いや考え方】【健康への心遣い】といった、高齢者の内面についての学び

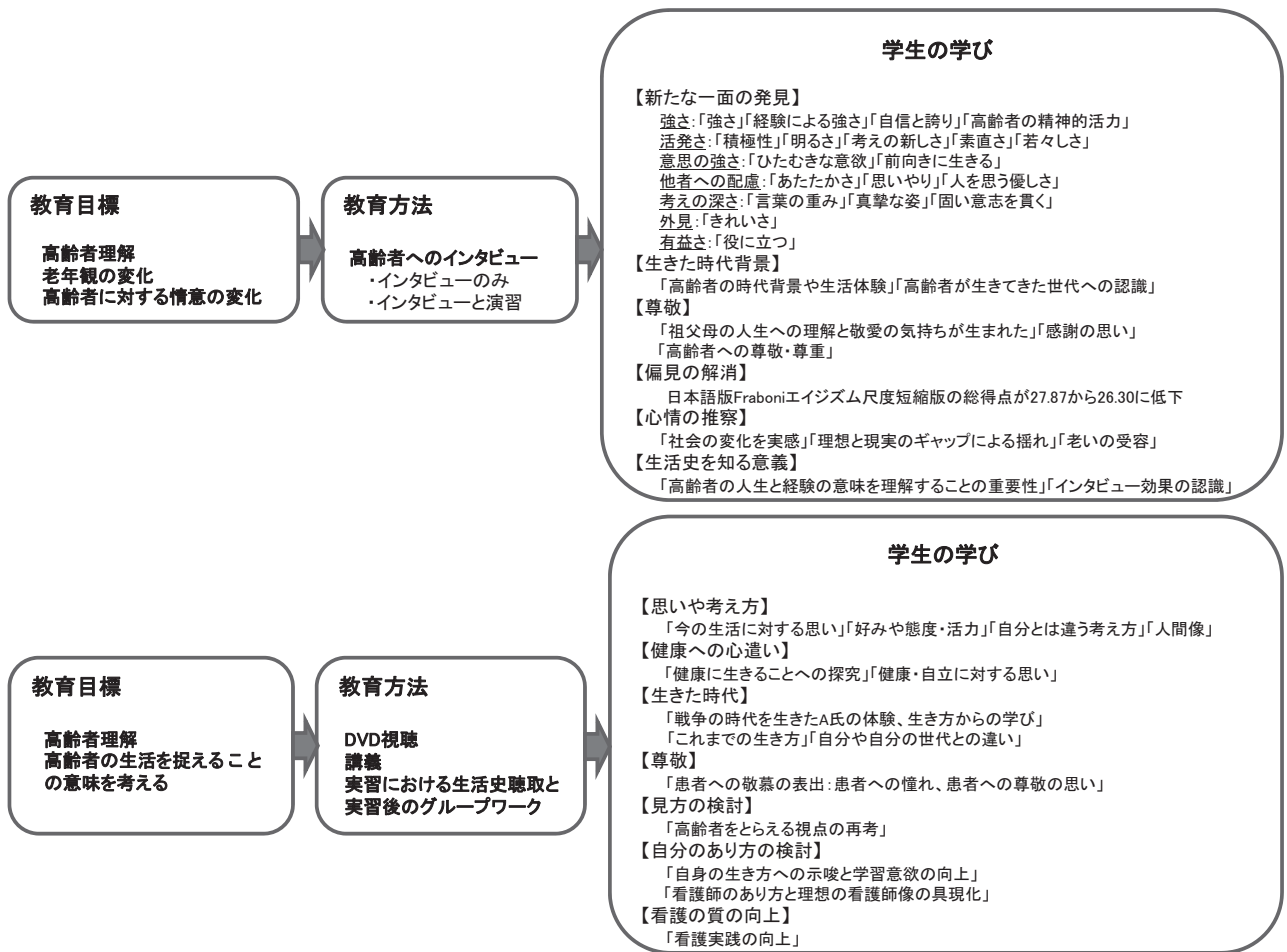


図1. 教育目標と教育方法、学生の学びの関連性

があり、またこのような学びが得られたことから、自分が高齢者をとらえる際の【見方の検討】や、高齢者の存在と自分を対比させたことがうかがえる【自分のあり方の検討】というような、自分自身のことを振り返るといふ思考に結びつくことが考えられる。さらに、生活史をとらえることの意味として、【看護の質の向上】があるとの学びもあった。以上のことから、学生にインタビューを行ってもらうことで、生きた時代背景を知り得ることができ、高齢者に対する尊敬の念を持つことができるが、高齢者に関する新たな知識の獲得や、自分の高齢者に対する認識の変化にとどまる。そこに、教員による説明が加わることで、学生が自分自身の高齢者をとらえる視点を見直すことや、自分の生活姿勢を顧みることへと繋がり、より多様な学びをもたらすことが示唆された。木下(1993)は、高齢者の生活史を知ることの意味を、ケア対象者の高齢者と人間的で意味のある関わり合いをしていくため

に、その人の生活史を知るとは重要な知的戦略になると述べている。このことから、生活史を用いた教育は、学生が単に知識を獲得したり、尊敬の念を抱くだけでなく、それを個人の内省に結びつけることで、より深い人間的な関わり合いができるようになるための能力を培う機会となり得る。学生に対して高齢者の生活史を知る教育をおこなう場合、その経験が学生自身の内面に影響を与えようように、教育方法を立案することが求められると考えた。

ただし、インタビューを行った学生の学びの中に、【生活史を知る意義】があることから、生活史を知ることさらに自分なりに意味づけて学んでいる学生もいることがうかがえる。この結果から、インタビューを行っただけでは、そのことを知る意義が学べないわけではなく、学生自身で生活史を知ったことの意味を考えることができる可能性もあることが示唆された。

今後の教育における方法としては、学生が高齢者の

生活史を知る機会を持った後に、教員から説明を加えて、生活史を知ることの意味や意義について考えることを促すことが考えられる。また、学生による気づきを引き出すことを意図する場合には、生活史に関するインタビューを実施する前に生活史を知る意味を伝え、インタビュー結果を基に、高齢者の現在の様子である、身体機能、生活習慣、価値観などが、生活史の中でどのように形成されてきたかを分析的にとらえるような課題を行うことが考えられる。

本研究は、生活史を用いた教育方法について、最近10年の文献に絞り、現在の状況をとらえ、検討した。今後は、歴史的な変遷についても検討し、過去の取り組みについてとらえ、今後の方向性を絞りたい。また、実際に高齢者へのインタビューと共に、教員による説明を加える教育を行うことで、より高齢者に対する理解を深められる教育方法を探求していきたい。

## V おわりに

高齢者を理解するために、高齢者の生活史を用いる教育方法は、複数の目的で用いられている。目的や意味を十分に検討したうえで、方法を考える必要がある。また、学生が、生活史が現在の高齢者の生活習慣や価値観を形成していることを理解するためには、単にインタビューを行うだけではなく、その結果を教員による講義やグループワークを通して振り返って意味づけるプロセスが重要である。

## 文献

- 浅井さおり, 小泉未央, 沼里礼美ら (2015). 看護学生の高齢者理解のための視聴覚教材の評価—生活史インタビューで構成した試作教材の有用性. 獨協医科大学看護学部紀要, 9, 21-33.
- 畑野相子, 箕原文子 (2013). 高齢者看護学実習におけるライフインタビューと高齢者理解との関連—高齢者イメージとエイジズムの変化の分析. 滋賀医科大学看護学ジャーナル, 11 (1), 23-27.
- 伊藤良子, 大町弥生, 中山由美ら (2006). 成人・老年期にある対象の理解—インタビューを行った看護学生の学び—. 藍野学院紀要, 26-36.
- 木下康仁 (1993). 老人ケアの人間学. 130-131. 東京: 医学書院.
- 古城幸, 木下香織, 馬本 智恵 (2012). 看護初学者の高齢者理解を深める教育方法の試み—KJ法を活用した「祖父母のライフヒストリーの語りを聴く」課題からの学び. インターナショナル Nursing Care Research, 11 (1), 99-105.
- 古城幸, 木下香織 (2007). 高齢者理解を広げる映画教材の教育効果. 新見公立短期大学紀要, 28, 1-6.
- 松田武美, 福田峰子, 梅田奈歩ら (2015). 看護学生・高齢者世代間交流による相互学習による取り組みの効果—ライフヒストリー・インタビューによる傾聴体験をとらえて. 生命健康科学研究紀要, 12, 54-61.
- 箕原文子, 畑野相子 (2014). 高齢者理解を目的としたライフインタビューの効果—エイジズムをアウトカムとした学びの分析. 滋賀医科大学看護学ジャーナル, 12 (1), 27-30.
- 成島美里, 押領司民, 細田江里 (2010). 老年看護学実習において学生が生活史を聴取する意義. 日本看護学教育学会誌学術集会講演集, 20, 156.
- 岡本紀子, 高田大輔, 泉キヨ子 (2013). 高齢者疑似体験における体験と観察を通しての看護系大学1年生の気づき. 帝京科学大学紀要, 19, 139-145.
- 小木曾加奈子, 安藤邑恵 (2010). 看護学生における高齢者理解—ライフヒストリーのインタビューを基にした内容分析. 教育医学, 55 (3), 283-292.
- 尾崎章子, 斎藤美華, 東海林志保 (2016). 老年看護学教育にライフヒストリーインタビューをとり入れた学習成果. 東北大学医学部保健学科紀要, 25 (1), 39-45.
- 坂下恵美, 西田佳世, 松井美由紀ら (2009). 地域高齢者からの生活史の聞き取り演習による看護学生の高齢者観の変化. 日本看護科学学会学術集会講演集 29 回, 227.
- 櫻井清美, 尾島喜代美 (2014). ライフヒストリーインタビューを在宅高齢者に行った看護学生の思い—情意領域の学習効果. 日本看護学会論文集 地域看護, 44, 192-195.
- 関千代子, 堀内ふき (2006). 看護学生による高齢者へのライフヒストリー・インタビューにおける学習内容の分析. 日本看護科学学会学術集会講演集

26 回, 366.

清水昌美, 坪井桂子, 小池香織ら (2014). 老年期を健康に生きる教育ボランティアによる授業の意義  
看護学生と教育ボランティアそれぞれの視点から. 神戸市看護大学紀要, 18, 47-54.  
高田由美, 佐藤美恵子, 小野麻由子ら (2015). 高齢

者理解における学生の学びの視点に関する研究.  
日本赤十字秋田看護大学日本赤十字秋田短期大学  
紀要, 19, 1-8.

山本君子 (2010). 看護学生による高齢者の生活歴聴取がもたらす学習効果. 日本看護研究学会雑誌, 33 (3), 313.

